

# 開高健『日本三文オペラ』論

— 在日朝鮮人キムの役割の重要性 —

増田周子

はじめに

開高健『日本三文オペラ』は、開高健の大阪を描いた作品のうちで、出色のものである。発表当初から、小田切秀雄が「こんどの『文学界』新年号の『日本三文オペラ』という連載小説の第一回は新たな文学的發展を示す力作である<sup>①</sup>」と述べるように、期待を持って迎えられた。しかし、連載が進むにつれ、「アパッチ族の野性的な活力への憧れと、現代日本の風刺的な寓意画を描こうという意図とが、ついに最後まで融け合わなかったのではないか<sup>②</sup>」「あの小説はつまらなかつた<sup>③</sup>」などの悪評や、作品の終盤を疑問視した評が続く。第一回目では「力作である」と評した小田切秀雄も、「第一回の、みなが大挙して押しこんでいくところの描写などは生き生きしていたと思う。しかしあとが続かなかつた<sup>④</sup>」と、後半の悪さを指摘する。さらに、野間宏も「始めは面白かつたんで

すよ。始めにはエネルギーがあつた。それがつづかなかつた<sup>⑤</sup>」と、やはり後半には満足していないのである。

これらの評者の後半が悪いという指摘をふまえ、越前谷宏は、「こうした分裂・不連続感を抱かせるのはなぜなのだろうか」という疑問を持ち、開高が「ルポタージュ的方法に依拠<sup>⑥</sup>」して、この作品を書き、「アパッチ族に『戦後』の『可能性』を賭けていた」のであるが、「現実問題としてアパッチ族はあつけなく壊滅してしまつた」。そのため、「開高は、いわば『戦後』の『不可能性』へと転じざるをえなくなつてしまつたのである」と述べる。そうして、「前半のエネルギーの奔騰は、壊滅に向けて急速に減耗していかざるをえないのである<sup>⑦</sup>」と結論づけた。

だが、果たして、作品の後半は、本当に多くの評者が述べる如くに悪いと言えるのであろうか。キムという在日朝鮮人のボスに注目して、組織や連帯感などに着眼して作品を分析していくと必

ずしも、本作品の後半が失速しているとは言えないのではないか。むしろ後半には作品の核となる重要な事項が隠されている。

本作品は、構造について論じた山田宗史「開高健『日本三文オペラ』の屈折——自己批判の構造<sup>7)</sup>」や、上池美和などのように当時の大阪の鉄屑、スクラップ状況をふまえた上でのフィールド調査などのなかで取り上げられた先行研究もあるが、本稿では作品を詳細に分析しながら、後半の展開に注目し、新たな「日本三文オペラ」の読みの可能性を考えていきたい。

#### 一 「日本三文オペラ」の成立と発表経緯

「日本三文オペラ」は、一九五九年一月一日〜七月一日まで、『文学界』に七回に亘って連載された大阪陸軍砲兵工廠跡地での物語である。開高健は、『文学界』に連載中次のようなコメントを記している。

「日本三文オペラ」という作品には手こずっている。文体や発想法や主題などいろいろな面で私は自分のカラをたえず破りつづけていきたいと思っているのだが、そのきっかけのひとつがこれである<sup>8)</sup>。

このように、開高健は、作品発表当初から、手こずりながらも、自分のこれまでの発想を転換させていく契機にしようと考えてい

た。さて、開高健は、作品を発表するにあたり、どのようなことを行ったのであろうか。一九五八年一〇月「詩人金時鐘の案内で、生野区猪飼野方面に『日本三文オペラ』の取材をする<sup>10)</sup>」とある。また、開高健は、「開高健年譜<sup>11)</sup>」で、次の如くに記している。

前年の夏、ノイローゼを晴らすために大阪の泥棒部落へ行ったときの経験をもとにして書いた。部落のなかへ入ろうにも入りようがなくて困っていたところ、ある新聞社にいる友人の友人がこの部落のある班の親玉を呼んでくるからと言うので、難波の駅で待っていたら、むこうからやって来たのが妻の詩人仲間の金時鐘であったのにはおどろかさされた。

つまり、前年度の夏ごろから、金時鐘らに取材をし、秋頃には、大阪の泥棒部落へ何度も通い、作品を構築したのである。谷澤永一『回想開高健<sup>12)</sup>』によると、開高健、梁石日、金時鐘、長谷川龍夫、木場康治が、一九五八年八月、生野区で、ドロクロを飲んでモツを食べ、この部落の人々の話を彼等から聞いた。興味を持った開高はこの部落のことをさらに取材するため、谷澤家に泊まり込んで、部落に通ったという。かなり実話に基づく取材をしながら描いた作品なのである。なお、取材の詳細については、利用した同時代の新聞記事などを調査した三重野ゆか、越前谷宏らの詳細な論考がある。また、「大阪造兵工廠跡地 金鐘さんに行く<sup>13)</sup>」で、

金さんは、キョロキョロするが、高層ビルが立ち並び、記憶の手がかりがつかめない。やっと見つけた橋のたもとを指さし、「あの湿地帯に、バラック作りの家が密集していたんですよ」と、つぶやいた。

作家開高健が「日本三文オペラ」に描いた、どん底労働者たちの悲喜劇の舞台だ<sup>14</sup>。

とあるので、金時鐘らに連れて行ってもらって取材したのは本当のことであろう。次章からは、章を追って考察していきたい。

## 二 『日本三文オペラ』第一章「アパッチ族」

『日本三文オペラ』は、第二章「アパッチ族」、第二章「親分、先頭、ザコ、渡し、もぐり」、第三章「ごった煮、または、だましだまされつ」、第四章「てんではらばら」、第五章「銀が……」、第六章「終章 どこへ？」の六章で構成されている。章ごとに順を追いながら考察していきたい。

第一章冒頭では、のちにフクスケと仲間から呼ばれる男が、大阪南のジャンジャン横町を歩いている場面が描かれる。フクスケは、眼はかすみ、ぼろぼろの身なりで、移動すれば「塵芥山の移動」であり、職業、女房、子供などあらゆる属性を失ってすでに久しく、「悪臭を発する都会のひき肉」という形容が相応しい。フクスケは空腹が激しく、いまにも餓死しそうな状態であった。作

品には、新世界を胃袋、ジャンジャン横町は胃袋と繋がる腸管とある。フクスケは、不消化物のように、新世界とジャンジャン横町をうろろう動き回った。また、新世界は「多汁質な湿疹部」と記されている。身体感覚や皮膚感覚で街を表現している点は非常に興味深い。

そうしているうちに、朝鮮人の女（のちにキムの女房と判明）に呼び止められ、煮込みとモツ井を食べさせて貰う。その代わり、ある仕事をするように女に頼まれた。そして、「大阪の低湿地帯で、中小企業の町工場や朝鮮人町が集結しているところ」の部落につれて行かれる。そこは、またしても「むらむらした湿疹部」であり、アパッチ部落と言われていた。つまり、新世界とアパッチ部落は、同質のものであると描かれている。

このことは、注目すべき点である。新世界も、アパッチ部落も食に充ち満ちていて、雑多で庶民的でごちゃごちゃしているが、人間を救う場所であるという意味においては、同質なのである。フクスケは、仕事は何かを朝鮮人の女に尋ねた。すると、「笑うのやがな」と答えが返ってきた。笑うとは「食うこつちゃー」と言う。この第一章では、食う⇨笑うと設定されている。このことも、作品の中で重要である。つまり、人間の心が豊かであり、笑顔を発するためには、空腹ではだめなのである。新世界も、アパッチ部落も食べ物に満ちた世界であり、仕事は、笑うことのできる、空腹を満たす、アパッチ部落で行うものであった。

アパッチ部落の人々の仕事は、大阪陸軍砲兵工廠跡地に埋もれている鉄屑を掘り起こし、部落外に運び出し、お金にかえ、生活していくことであつた。フクスケの任された仕事は、もっぱらその鉄屑を掘る仕事であつた。鉄屑は、戦後も非常に高価なものであつた。ここで、部落の場所を説明しよう。作品中には、次のように説明される。

大阪市東区杉山町にあるため、通称「杉山鉦山」と呼ばれている。その部落は、戦争中日本に七カ所あつた兵器工場のうちで最も規模の大きなもので、日本最大、そしてアジア最大であつた。敷地面積は三五万六千五百坪で、工場の建坪は一二万坪という広さで、そこで作られる製品は、兵器全体であつた。明治一二年の創業から、敗戦の昭和二〇まで、六六年かかって築きあげ、敗戦の年には七万人が労働していた。数回の爆撃で崩され、昭和二〇年八月一四日の終戦宣言発布の一日前に、すさまじい攻撃で全滅した。そして、

公開された多くの記録によれば、ポツダム宣言受諾はすでに一週間以前に決定されていたのだから、この三十五万坪の巨大な廃墟は軍閥政治家や天皇の、面子意識と優柔不断そのものをさらけだしているといえよう。(『日本三文オペラ』一章・三)

とある。このことは、実際の事象と重なり、二〇一九年にも次のように報道されている。

1945年8月14日昼。米軍が現在の大阪城公園付近にあつた兵器工場「大阪砲兵工廠(こうしょう)」を狙って爆撃し、一部は市街地に落ち、国鉄京橋駅(当時)ホームを直撃した。正確な犠牲者数はわかっておらず、名前が判明しただけで200人以上、500〜600人に上るといふ説もある。

空襲があつた時点でアメリカは広島、長崎へ原爆を投下し、ソ連も対日参戦。日本は14日、無条件降伏を求めるポツダム宣言受諾を決めた。<sup>15)</sup>

つまり、作品中にもあるように、政府がポツダム宣言を受諾するのかがどうかを迷っている間に、多くの労働者や市民達が、政府高官らの「馬鹿の虚栄心のために」犬死してしまい、そして、兵器工場の鉄屑が埋もれることとなつたのである。

三 『日本三文オペラ』第二章「親分、先頭、ザコ、渡し、もぐり」

第二章では、フクスケは、キムの女房に新世界で誘われ、一日鉄屑掘り起こしの仕事をしたあと、キムからアパッチ部落の話聞く。キムの説明では、アパッチ部落にはアパッチ族からなる五

つの大きな組があり、それぞれ親分と手下があり、キムも一つの組の親分であった。仕事は全て実質主義で、賃金は組によって別々のシステムがあるが、折半だとか四分六だとかは、その方法はすべて「親分と子分の話合いで決定し、けっして一方的な強制取引はやらない」。「仕事の強制もない」ものであった。つまり、アパッチ部落ほど「高級な自由を持つ集団こそは理想社会といえる」。そのうえ、ここは寄合い世帯で、朝鮮、日本、沖縄、国境なしで、税金も戸籍もない。指名手配や、密入国者もいる。さらに、各組は、例えばキムの組では、親分、先頭、ザコ、渡し、もぐりなどに分けられ、分業体制が徹底している。先頭は、「アパッチ族の仕事のなかでもっとも重要な部分を担当し、グループの最尖端にたつて超重労働をやった」。グループには他にザコがいたが、ザコは「老人、女、子供、不具者」などで、先頭と同じようには仕事できないが、警察の見張りをやったりそれぞれの能力に応じた仕事をしていて、「分配金は先頭連中と同額であった」。このような多種多様の人種で、普通の社会では差別されそうな人々であつても、アパッチ部落の社会では対等で、平等であり、このアパッチ部落には、三百人から四百人も人がいるが、いわば理想社会として描かれている。また、渡しの仕事は、先頭やザコを対岸に渡してやる仕事であると記されている。作中では、渡し屋の一人に「トウジョウ・ヒロヒト」という名前を付けている。東条英樹と天皇裕仁がアパッチ部落での鉄屑拾いの渡しをやっているという設定

である。戦争責任を担つて、労働しろと言わんばかりである。ここには、社会に対する批判と、反戦の意味が込められているといえるだろう。

ある日、キムの部落にある男がやつて来た。その男は、「ノースイシユ」で、フクスケから見て頭が「どこか狂っているうえに」、右手は指が五本なく、左手は三本、「足がびっこ」で、手足の動作はまったくちぐはぐで、運動神経が犯されたい様相を呈していた。動けば、軟体動物の脆弱運動さながらであった。老人は、「牛の破片をめざして」、動くのである。余りの悲惨さに、アパッチ族達も眼を背けた。老人は、「機械か、化学薬品か、梅毒か」に侵されたようで、老人の骨格は、「明確に彼が肉体労働者だったことを物語っていた。この老人の肉のうえをなにがどんな速度と速さで通過したのか、誰にも想像がついて考える気になれなかった」。キムは、この老人に、食べ物を与え、そして、水売りの仕事を与えた。老人は、資本家によって身体障害者にされたのである。障害者になれば、一九四八年に施行された「優生保護法」のもとでは、国家も、地方公共団体も無視、人間ではなく物扱い、働けない老人が飢えて死のうが関係ない。しかし、キムら率いるアパッチ部落は、この老人を受け入れたのであった。すなわち、差別は全くなく、賃金の比率も話し合いで決め、キムの部落はまさに理想郷であった。

さて、キムの組にはタマという人がいる。沖縄系の漁師であつ

た。強靱な肺を持ちもぐりを行うのだ。寝屋川の一支流で、大阪湾に通じている平野川という運河、そこは、底知れぬ腐敗と、沈殿物で澱み、いつも腐臭をあげている。犬の死骸、野菜屑、機械油、尿などが、「とけて、くずれて、腐りきつ」ていた。その中にタマはもぐり、警察に捕まりそうになつたりして、船ごと沈めた船にロープをかけ、引き上げるための準備をするのであった。タマの仕事は、苦難を伴う「もぐり」であった。

以上のように、アパッチ族の仕事は、全て命がけであった。鉄は重い、運ぶのも大変である。時には警察や守衛につかまりそうになる、しかし、「共同責任」と分業制と話し合いのもとに納得した分配金により、円を描くように丸く収まり、強い仲間意識と連帯感があった。差別もない理想社会である。二章の最後は、「かくてアパッチ部落の体制は比類なき完全円となつたかに見えた」で終わる。

しかし、「なつたかに見えた」というように、次章から崩れていくアパッチ族の体制を暗示しているのである。

#### 四 『日本三文オペラ』第三章「ごつた煮、または、だましまされつ」

二章では、アパッチ部落の組での鉄屑掘り起しの仕事で、親分と子分との話し合いで行われ、作品発表当時の一九五〇年代では、差別を受けて続けていたたとえ障害者であっても、女性でも、在

日朝鮮人でも、沖縄出身者であっても差別されることなどない理想社会として描かれていることを説明した。ちなみに、在日朝鮮人の戦後の扱いは次のように記されている。

GHQは45年11月1日、「日本占領及び管理のための連合国最高指令官に対する降伏後の初期の基本指令」に基づいて、「朝鮮人は軍事上の安全が許す限り解放国民として取り扱う。彼等は日本人という用語には含まれないが、彼等は日本国民であったのであり必要な場合は敵国人として取り扱うことが出来る」とした。

「これは朝鮮人を解放国民として扱うことを明確にしたものであり、占領政策に障害をきたす問題が生じた場合には日本人と同じ扱いをすることである」(在日朝鮮人の人権と日本の法律)。ただ、この通達から台湾人、在日朝鮮人は解放国民でも日本人でもない「第三国人」だとの呼称が、当時の日本人の間で浮上した。<sup>(16)</sup>

当時は「第三国人」として、在日朝鮮人を差別することが一般的であった。だが、アパッチ部落では、被差別者も平等の身分保障を受けていたのであったが、作品の三章は、そこに陰りが見えてくる様子が記されている。先に説明した、一九四五年の八月一日の空襲での「爆弾はあらゆるものを吹き飛ばし、風と土は想

像もつかないようなものを想像もつきかねる場所に埋めたようである」とあり、アパッチ部落の労働者達は、どこに鉄屑が埋まっているのかわからないことと、自分一人だけが掘り当てて儲けようと考え、デマと法螺がいきかうようになっていくのであった。アパッチ部落では、掘り出した鉄を、ほんの少しでも動かしておけば、誰も、どの組もそれを無断で持つて行くことなどなかった。それは守るべきルールであった。アパッチ部落には「縄張りもなければ権利もなく、相互の協定はなにもない」。そのような、部落であったのに、秩序がどんどん乱れてきたのである。アパッチ部落には、主要な五つの組があった。キムはその一つの組の親分だった。そしてフクスケはキムの組で正式に働くことになった。フクスケはキムに早速、井鉢に入ったホルモンの焼き肉をご馳走になった。その時、キムの組の一座の男たちは、

口ぐちになにかを叫びながら、ほとんどつかみあいをせんばかりのいきおいでフクスケにとびかかって井鉢をとりあげた。彼らはさきを争って井鉢にしがみつき、一匙、二匙すすすかすすらないかでつぎの男に奪いとられ、いまいまして舌うちした。

（『日本三文オペラ』三章・一）

こんな風に、奪い合い、略奪するのが当たり前の日常になってしまったのである。またキムはこんな風にも言う。

「ええか、よその組の奴に出会うたら、女の話や食い物の話なんかをしかけて、それとなくむこうがどんなブツをどこで見つけたか聞きだすのやぞ。ぜったいこつちのことをいうたらあかんぞ。全身、耳にせえ。早目早耳、早糞早駆け、これがわいらのもつとおや。（後略）」（『日本三文オペラ』三章・二）

誰よりも先駆けて、自分の組だけが得をするように、キム親分自ら指示し始めるのである。そうして、それはキムの組だけではなく「部落のすべての組とあらゆる人間は、たえず裏をかいதாகれたりすること暮らしていたのだ」。すなわち、アパッチ部落の仲間意識と連帯感はずれ、みんな自分中心主義になっていくのであった。その状態は、アパッチ部落を見張っている守衛にも表れていた。守衛の主任は、「禿げ」と呼ばれるものであったが、守衛たちは、二つの組にわかれ、一方は「禿げ」の組、他方は、「伍長」の組に属した。「伍長」は、「守衛全員の実質上の組長」で、「禿げ」の組に属せられた守衛はみな、「伍長」の組に入りたがっていた。そして、「伍長はアパッチ部落の五つの組の親分めいめいと取引をしてブツの情報を内通してやっていた」のであった。そして、親分たちもまた、ザコにブツをあたらせ、配下が掘り出したブツを買い上げ、仕切り屋に転売し「マージンで自分の収入の利益を得ている」のだ。親分も、ほとんど自分勝手になっていた。そして親分たちは、めいめいばらばらに守衛たち

を買収した。そして親分は、情報は得るが、部下たちには、「匂わせ」はするが、「絶対秘密」にしていた。つまり、部下をも親分は欺くのである。そのうち、フクスケは、親分の情報通りの場所に行っても、鉄屑などがないことに気づき、「伍長の奴が一つの情報を同時に親分五人全部に知らしめるわけや。みんな自分ひとりが教えられたと思ひこんどる」というカラクリを知ってしまう。「伍長」も親分らをだますのであった。まさに、章題のとおり、「だましまされつ」の世界であった。

そんなある日、自分の親分「伍長」にいはられて不愉快な思いをしているというある守衛が、フクスケの所にやってきて自分と手を組もうと持ち掛ける。この守衛は、「伍長」にせつせと法螺を吹き、その男は、「アパッチ部落はやくざやないから義理人情もへつたくれもあるもんか。さつさと親分なんか後足で砂かけてこませ……」と言う。親分を出し抜いてやろうと言い出すのである。もう、すべての秩序が崩壊していき、誰も信じられない状態になっていくのだ。

本章の最後には、フクスケとめっかちがキムの家の前で立ち話をしていると、一人の婆さんが袋に鉄屑を入れてキムに売りに来たという描写がある。それは高価なタンガロイであった。キム、めっかちは共に、人には悟られないようにして、婆さんが拾った場所を聞き出し、人より一步でも先にそこへ行くとする。めっかちはフクスケを連れて、親分のキムを出し抜いて、タンガロイ

を掘り出そうとしていた。しかし、婆さんは、既に多くの人に、拾った場所をばらまいていた。このように、親分と子分どちらも、欲に翻弄されだまし合いをはじめていったのである。

## 五 『日本三文オペラ』第四章「てんでばらばら」

第四章では、冒頭に「はじめのうち部落には完全な分業制があるかとみえた」と記されている。「あるかとみえた」とあるのは、注目すべきである。フクスケがアパッチ部落で出会った、昔炭鉱の組合運動で首になったという男は、「……能力に応じて働き、労働に応じて支払われるば、こぎゃんよかこつ、なかたいな。ここは地上天国ぞ」というが、その口調には激しい冷嘲もみなぎっていた。そして次のように続く。

フクスケがその言葉の意味を問いただしてみると、だいたいそれは、分相応のことをすれば分相応の報いがあるというよきな意味のことで理屈はいつもそのとおりなのだが、この世ではけつしてそうはいかない。なぜかといえは、分相応の判断が誰にもつかないからで、はたらいたやつが思っている分相応と、金を払うやつが思っている分相応というものがないつでもどこでも食いちがうのだ、そこから争いが生まれるのだ、と聞かされた。

（『日本三文オペラ』第四章・一）



つまり、一見平等のように見えても、親分と子分とで感覚が異なり、不満を持つものが出てくるのである。そうして、「分業制がまつたくあやふやなもの」になっていく。

アパッチ族たちは、親分を親分とも思わず、気に入らなければさつさと裏切り、寝返りをうち、きわめて乾いた人間関係を満喫していたのである。（『日本三文オペラ』四章・二）

アパッチ部落の人間は「定点をもたない」し、「その日その日の気分ひとつであちらの組へいたり、こちらの組にかわってみたり」した。分配法やマージンも組や親分の気質によって異なっていた。しかし、「この不平等に正面から攻撃して制度をかえようとするものはひとりもなかった」。そのような中で、フクスケの親分のキムも、不満があったら出て行ってもいいし、戻っ来てもいいという。それは、「自分の不当利得を寛容の誇示にすりかえ」ていることであり、キムは、必ず自分の元に戻ってくると知っていないが、出ていくことをそそのかして「恩を売りつけようとした」のである。この四章に至っては、理想郷とは程遠くなってきたアパッチ部落が描かれる。

本章の終盤で、朝鮮人のゴンは、フクスケに、親分のキムに言うように、働かされて、収奪されるからとぬけがけを提案する。フクスケはそれにのり、アパッチ部落の工場の鉄骨枠が残った場所に

行く。ここは、どんなアパッチ族たちも、避けて通っていたところだった。なぜなら、ここは、〈無機物〉の密集する、不毛な地帯であったからである。ここは、「食う」（鉄屑を掘り出して収穫にする）ことのできない、場所であった。しかし、ゴンはいきなり、その鉄骨に登りはじめ、フクスケもまた、それに続いた。落ちれば、即死である。そこに二人の警官がやって来た。フクスケとゴンは警官を挑発したために、持久戦がはじまった。

結局、午後の三時から夕方の六時頃まで、ほぼ三時間近く鉄骨のうえで頑張った。（中略）彼ら二人はぜったいのほつてくることがないし、また、たった二人のために機動部隊を呼びつけることもあるまいと思っただけですこしも気にならなかったが、ただ、真夏の午後の日光と、灼けきった鉄と、高所の緊張には二人ともすっかり衰弱してしまった。（中略）夕方になつて警官が去ったあとで鉄骨をおりると、二人は草むらにたおれたまましばらく声もだせなかった。

（『日本三文オペラ』四章・二）

結局、ゴンとフクスケは警官との持久戦に勝利するが、へとへとだった。そのうち、新聞のあちこちに、この大阪のアパッチ部落のことが記事になった。「新聞が書きたてたために部落の活動は目に見えて窮屈になった」のである。失業者達が、その報道を聞き

つけて、他の地域からやってきて、アパッチ部落の人口密度はふくれあがった。そして、

仲間から仲間への寝返り、裏切り、ぬげがけ、だしぬきはますますはげしくなり、力の腐敗は発作的な喧嘩や口論や泥酔などの膿をいたるところに生みだした。鉱山へ出勤する各組の人数は次第に増加したが、たえまない、警官隊の出勤によってブツの発掘量は反比例の現象を来たしはじめた。

〔『日本三文オペラ』四章・三〕

という状態になってしまふのである。ある日、アパッチ部落の中で、古レールの小山が発見された。だが、守衛は買収しているが、今では「警官が出張してきて二六時中目をひかせている」。「いつ来襲するかわからない警官隊……」この時、ラバは「……わいに任しとき」とのりだした。ラバの提案は、自ら警察に電話をかけて、他の組のやつを売りつけるといふものだった。こうして、

鉱山に出勤したほかの組の連中は一箇小隊の警官に追いたたかれてさんざんな目に会い、ほとんどろくな仕事もできないで、夜あけ頃、ちりちりばらばらに部落へもどってきた。みんな道具を失い、特車を押収され、蒼ざめた影のように「こそ」と掘立小屋の寝床へもぐりこんだ。〔『日本三文オペラ』四章・三〕

ラバは、このように、他の組を欺き、自分の所属するキムの組だけが利益を得ればよいと考えたのであった。こうして、三章から書かれているように、「親分、先頭、ザコ、渡し、もぐり」など、仲間内で「だましまされつ」しているうちに、「てんでばらばら」になってしまふことが、この章では描かれている。ばらばらに行動し、警官の眼につくようになり、一人や二人ではなく、警官隊が出撃し、そうして、アパッチ族たちは、追い詰められていくのである。

六 「日本三文オペラ」第五章「銀が……」

本章では、冒頭で、警官隊の大検拳が描かれる。助かったのは、フクスケとめっかちの二人だけであった。

毎日、警察の摘発ははげしくきびしくなるばかりであった。不景気に追いまくられた失業者や浮浪者や前科者たちがどんどん流れこんで部落の人口が増すにつれて、いままでの分業体制は崩れだし、日を追って混乱が部落を支配するようになってきた。〔『日本三文オペラ』五章・一〕

どんどんよその土地から失業者がやってくる。新米者たちは、アパッチ部落のルールを知らないで、さまざま小事件が発生した。新米者たちはグループにも所属しない者もいて、一匹狼の

方が多くなったりもする。おまけに、昔は、証拠不十分で検挙されても微罪で釈放されていたが、警官は「現行犯逮捕の強化」をはじめ、私服刑事がアパッチ族に化けたりして逮捕をするようになっていく。そのうち、皆、アパッチ部落の人たちは神経質になつていった。人と人、仲間同士が信じられなくなっていくのである。そして、「世間話か猥談のほかにはなにひとつとしてしゃべらないように厳戒をはじめた」。第四章で書かれたバラバラ状態がますます激しくなつていった。さらには、

私服の潜行とスパイとパトロールのほかに警察は鉦山の守衛詰所へ警官を常駐させて監視にあたらせた。このためにはなただ仕事やりにくくなつた。いままで鉦山の監視は守衛だけにまかされていたので、部落の親分たちは彼らを買収し、守衛もまたアパッチ族と共謀してブツの所在を教えてくれたり、監視をゆるめたりしてくれたのだが、それがまったく今度は不可能になつてしまった。 (『日本三文オペラ』五章・一)

さらに、警官隊の活動に刺激された、財務局が、アパッチ族が鉄骨や鉄屑の埋まった「鉦山」に侵入するのを阻止する、「鉦山」の封鎖をはじめた。そして、川を渡つて、部落の外にアパッチ族が出られないように、鉄条網を張り巡らせたのである。どうにもならなくなつた時、銀が出現したという噂がおこる。追ひ詰め

られたキムの組は、止むを得ず鉦山近くの工場の作業場の変圧器を盗むという「非合法の窃盗」を思い立つ。そのうち銀板が見つかったというわざも流れた。キムは、自分の組の者をあつめ、

銀板略奪の命令を発動した。と同時に、よその組の連中にはぜつたいしらをきつて知らぬ顔をするか、それとも、銀板は行方不明になつたというあらゆる種類のデマをとばして悲観主義をよそおうか、あるいは銀板の存在そのものを否定してあのアタリ屋を罵るか、この三つを臨機応変、ごちゃまぜに使つてキム組の行動いっさいを煙幕に包んでしまえと宣言したのである。事情はほかの組でも完全に同様であつた。

(『日本三文オペラ』五章・二)

こうして、ほかの組を欺き、自分の組だけが銀板の利益を得るために、嘘など今までついたことのないアタリ屋までもが「頭のおかしくなつた」「嘘をついてでもひとの注目をひくよりしかたのない愛情乞食の不具者」とレッテルをつけられるようになる。そうしてアパッチ族たちも混沌としていき、「すでに分業制は崩壊した」のであつた。いったんは、この様子に不安を覚え、親分たちは、「全部落の大同団結」を思い立つた。キムとキムの組のラバは、「どうして警察をごまかし、どうして該当物件を移動させるか」という主題を話し合わせた。キムとラバは「あらかじめ申しあ

わけてきたのではあるまいかと怪しみたくなるほどピッタリ呼吸をそろえてチーム・ワークをおこなった」のであった。だが、それは長くは続かなかつた。そのうちフクスケは「ラバがいったい、いま、なにを考えているのか」わからなくなつた。「ラバは自分の行動をまったく秘密にしてしまった」のであった。それだけではなくキムも「煙に巻くばかりで、あとはただ薄く笑つて去つた」のである。

きわめて少数の人間をのぞいたほかは部落の仲間全員をだましたり、警察に売りつけたりしたことはきわめて当を得たことというべきであつた。(中略)タンガロイが見つかつたというような、真偽のほども誰もたしかめることのできない、しかもけつして一言で法螺だと片附けてしまうわけにもいかならぬ噂の一つに銀板を仕立てあげたことはいへん正しかつた。

〔『日本三文オペラ』五章・四〕

このように、タンガロイ、ダイヤモンドなどいろいろな高価なものが見つかつたことにして、ラバは銀板からアパッチ族たちに目をそらすようにさせた。また、警察にも情報を錯綜させた。フクスケは「ラバは情勢を見てひそかに拍手したに相違ない。彼は警察の目をますますそらし、また、どんどん落伍者をつくつて最後の分前の額をつりあげようと思ひ、いよいよ気前よく仲間を売り

とばしにかかつたらしい。」と思つた。こうして銀版を自分達だけでとるために、人を出しぬぎ、追つ払うために、キムは、ラバとともに、真偽がわからないように吹聴して回つたのである。こうしてさんざん、群がるアパッチ族たちを追つ払つて、警察の監視のもとにある銀の小箱を積み込むための仕事にかかることを志願する者を募つた。キムとラバは、銀の小箱にしか目がなく、それ以外の鉄屑は、どうでもよかつたが、志願者たちは、貪欲、強欲で、そのあたりの全ての鉄屑を欲しがる。キムとラバは、余りに運んでいると、警察隊につかまるということを理由に反対するが、

途方もないスクラブの山を部落にかつきこめば二進も三進もとれなくなつて、あとを追つてきた警官に有無をいわさずつかまえられることは火を見るよりあきらからで、これはまったく無意味な自殺行為でしかあるまいが、(中略)銀をかくすにはますます都合だから、仲間の団結ということもふくめ、これ以上こちらの正気を主張するのはさしひかえようではないか、というように結論をくだした。

〔『日本三文オペラ』五章・四〕

ただ、こんなにバラバラで人を出し抜いてばかりのグループが成功するはずはない。案の定「企画は挫折した」のである。その夜の混乱は部落はじまつて以来で、「警察側の攻撃はかつてなく大

規模であった」。

## 七 「日本三文オペラ」終章「どこへ？」

終章では、最初に、第五章の銀争奪戦の警察隊とアパッチ族の攻防戦の様子が描かれる。ラバは、多くの鉄屑などを拾い集めて運びようとしていたが、車の下敷きになって瀕死の状態であった。警官も人手を集めてラバを救った。

車をのけた途端にラバはまっさおになって失神し、ジープへ運びこまれるときは警官たちの腋のあいだから手や足を薪のようになぶらぶらさせていた。（『日本三文オペラ』終章・一）

ラバの集めたブツは、全て押収され、ラバは逮捕されてしまう。銀の小箱も、確かに手に入れたはずなのに、ついにどこにいったか行方不明。もともと、本当にあったのか、「すべてがあいまいになっってしまうのであった。」銀のことで、

一カ月か二カ月というものは八百人ちかい人間がおたがい法螺を吹いたり、だましあつたり、会議をひらいてみたり、仲間を警察に売りとばしてみたり、右往左往の混乱をきわめたのだ。みんなの話と行動をラッキョの皮のように剥いていくとついに虚無にゆきつくばかりである。それからさきにある

のはからつぽの胃袋だけである。

（『日本三文オペラ』終章・一）

という状態にアパッチ族はなってしまった。フクスケも、アパッチ族も空腹を満たすために、そして「笑う」ために、このアパッチ部落にたどり着き、住み着いた。それにも関わらず、また、もともとアパッチ部落は、差別もなく、分業が徹底したそんな場所だったのに、だましあい、嘘をつきあう中で変化してしまった。理想郷の世界が崩壊したのであった。そうして、残ったのは、もとの「からつぽの胃袋」だけであった。すでにアパッチ族は、笑顔さえもすっかり忘れていた。ラバは、背骨が折れ、肋骨も二本つぶれ、「せんべい」のようになって死んでしまった。キムは、ラバの本名も答えられなかった。やがて、アパッチ部落はもとのように戻り、「てんでばらばらに暮らしはじめた」。「警察の手入れは日を追ってはげしく巧妙になり」、アパッチ族達に「孤独や苦痛」が沁み渡っていく。

ひとびとは、皮膚の内側によどみ、眼のうらや皺のなかにかがみこみ、孤独や苦痛を反芻するばかりになりだしたのだ。

（『日本三文オペラ』終章・二）

フクスケも「からつぽの胃袋をかかえて」、「広大な荒廃を見晴

らすと、いてもたってもいられなくなるのだ」った。欺き、てん  
でばらばらな部落には、虚しさしかなかった。そして、「部落では  
事故が頻発しはじめた」。

困窮と過労と神経疲労によるさまざま事故が発生し、たい  
ていは陋劣で悲惨、かつ、滑稽であった。(中略) ある男は、  
まっ暗闇のなかで工場の鉄骨にのぼってアングルを切ってい  
るうちに自分の乗っている枝とも知らずに作業をしてアング  
ルを切りおとすとともに自分も落下して墜死するという事件  
をひきおこした。

〔日本三文オペラ』終章・二〕

そして、その事故で怪我したり、化学廃液の中に埋没したとき、  
仲間たちは、「自分のかき集めた屑鉄が惜しいのと警官がこわいの  
とで死体を遺棄したまま一目散に遁走してしまった」。このよう  
に、アパッチ族たちは、自ら、信用できない社会を作りはじめ、  
金に翻弄され、仲間も、人間らしさもなくなってしまっている。  
そして夥しい死者を、わからないように葬る毎日であった。

そうしてキムは、「やがて、こういうことに耐えられなくなった」  
のである。キムは突然子分達を連れて刑事部長に、取り調べを緩  
めて貰えないかを頼みに行く。しかし、それは失敗に終わった。

キムは次には一転「職業安定所」へ行き、集団就職を頼みに行  
った。職業安定所には、失業者が沢山いた。また、キムは市庁舎

にアパッチ族の仕事を掛け合いに行った。バラバラになった、自  
分の組の部下たちのために、奔走するのである。しかし、職員は、  
スクラップ・ブックを広げながら、無意味な「虚栄と計算」に基  
づいた話をくどくどとはじめていった。そして、最後に「ここは  
実行機関ではない」と言い、何もしてくれないのであった。

すなわち、アパッチ族や失業者や、飢えていて、明日にも餓死  
してしまいうような人達のことでも全く真剣に考えず、役人たちは単  
なるお役所仕事をしているのであった。そこは、『相対的価値維持  
課』という部署であった。ようやく、まともな仕事につかせよう  
と、キムが立ち上がったにも関わらず、公共的な場所は、アパッ  
チ族の人権には向き合わず、職業を真剣に斡旋しようもしない  
のである。キムは次のように考える。

どうやら手の札はすっかり切れてしまったような気がする。  
刑事部長はやせたサンシヨウウオといった様子で暗い部屋の  
なかで表情をかえないし、職業安定所は栓塞をおこした血管  
のようだ。役所には階段と部屋とスクラップ・ブックがある  
きりだし、新聞社は問題だ、問題だというばかりで、当てに  
するのははじめからまちがっている。

〔日本三文オペラ』終章・三〕

公務員も、政治も、マスコミも何の役にもたたない。鉄屑泥棒

を部下にやめさせてやろうとしても誰も助けしてくれないのである。ここには痛烈な、一九五〇年代後半の社会批判が込められている。何もできないまま、アパッチ部落は、どんどん去っていく者が増え、永くは住みつかなくなった。キム組も同様であった。アパッチ部落は一挙に崩壊していく。しかし、作品の最後は、何もできない哀愁のままでは終わらない。最後、キムは残ったアパッチ族をトラックに乗せ、「せいぜいあっちこっちで生きのびてくれ。わいのいうことはそれだけや」と言った。めっかちは「新聞見とれ！」と言って、トラックを走らせ、「いまにも解体しそうな軋みをたてて走りだし、暗い道を明るいう町にむかって全速力で疾駆していった。」で終わる。この最後の表現には、何もしてくれない政府やマスコミをあてにするのではなく、たとえ貧乏でも、明るい未来を切り開こうとするエネルギーが感じられる。いったんバラバラになり、仲間を欺いていたアパッチ族たちは、キムによって再び人間性を取り戻し、団結を高めていったのである。連帯意識や仲間意識を取り戻すと、明るい未来は開けていく。作品には次のような描写がある。

部落には済州島出身者が多い。(中略)彼らの食欲さと勤勉さはおどろくべきものである。(中略)しかもその労働にはしばしば女が加わり、男もたじろくような奮力をふるう。

〔『日本三文オペラ』第五章・二〕

キムも朝鮮人なので、この済州島出身の人々と同様、男女平等で、「食欲さと勤勉さ」を備えた人物であった。キムは、どん底に落ち、部下を死なせ空しくなつて、初心にかえつて仲間のために親分として尽くそうと考えたのである。キムが最後に、仲間のために、たとえ無意味に終わったとしても親分として努力をしようと思いつつたところに、この作品の意義がある。当時差別されていた在日朝鮮人の人々が、人間が生きる上で必須の人権を意識して立ち上がるという役割設定が興味深い。人間はみな平等で、今後も、差別なく生きていくこと、そして、仲間や人権、誠実さがいかに必要であるかを物語っている。つまり多くの論者は、これまで、後半は失速しているとかつまらないなどと論じてきたが、後半には重要なテーマがあるといえるだろう。

#### 終わりに

以上、『日本三文オペラ』を章ごとに追ってみた。アパッチ族は、バラバラになり、そのことで警察につかまりやすくなつてしまった。親分のキムも、以前は、自分の欲の赴くままに生きていたが、最終的には、やはり、親分として仲間のために公権力と戦おうとする。本作品では、済州島から来た人々に対し、「勤勉さに舌を巻く」と記されている。アパッチ族には済州島出身の人々が多かった。キムも済州島の出身である。『日本三文オペラ』は、在日朝鮮人のキムが、率先して人間らしさとは何か、仲間とは何か

に気づき、組織に働きかけ、みなが人間性を取り戻していく物語である。が、そのキムの前に立ちはだかる、一九五〇年代の、どうにもならない、権力やお役所主義が厳然と存在する。それに対する、抵抗が後半には浮き彫りになっていく。キムはキーマンなのである。このように見ていくと、多くの評者達が、後半はつまらないと評しているが、むしろ後半は作品テーマに繋がる重要な点が描かれているといえる。朝鮮の人々の力により、人間性を見出すきっかけが記されていくのである。

開高健の『日本三文オペラ』は、ドイツの劇作家ブレヒトの戯曲『三文オペラ』を下敷きにし、開高自身も、ブレヒトは「政治商業資本、官僚、ジャーナリズムなど社会の全機構にたいする痛烈な罵倒」を描いていると述べている。開高は、自分はブレヒトほど力がないので、「泥棒を書くにとどめる」と謙遜して述べるが、やはり、公権力など、庶民の人権や生活を無視した強権への抵抗は意識していたであろう。だからこそ、日本版の「三文オペラ」を記したのである。また、作品中には、何度も悲惨の中の「滑稽」という言葉を記している。開高は、『日本三文オペラ』では「悲惨や懊悩とともに私は、笑いが描きたかった」ともいう。作中には、アパッチ族やアパッチ部落というネーミングの由来が、つぎのように描かれている。

「アパッチ族。アメリカ・インディアンの一族。性質は剽悍で

好戦的。(中略)スペイン人の侵攻に抵抗し、西部の開拓がはじまると開拓団や軍隊にも抵抗した。(後略)」

(『日本三文オペラ』第四章・三)

アパッチ族と呼ばれた、アパッチ部落の人々は、権力に抵抗して生きる集団であった。しかし、本作品では、いつのまにか、自分たちも仲間を無視して活動し、自らの生命も脅かされていく。本作品には、一九五〇年代の権力批判とともに、権力に対抗しようとしているように見えて、いつのまにか、組織の中でまた権力を持つてしまいがちな人間の滑稽さを浮き彫りにし、それに気づいて救われていく世界を描いているのである。

#### 注

- (1) 小田切秀雄「一九五八年展望」(『週刊読書人』一九五八年十二月二十二日)
- (2) 佐伯彰一「文芸時評」(『週刊読書人』一九五九年六月二十二日)
- (3) 江藤淳「現代作家論(下)」(『群像』一九六〇年二月)
- (4) 小田切秀雄「現代作家論(下)」(『群像』一九六〇年二月)
- (5) 野間宏「座談会 一九五九年度の文学の問題と傾向」(『新日本文学』一九五九年十二月)
- (6) 越前谷宏「開高健『日本三文オペラ』…ルポルタージュ的方法の陥穽」(『国文学論叢』二〇〇九年二月)
- (7) 山田宗史「開高健『日本三文オペラ』の屈折——自己批判の構造」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』二〇一九年三月)
- (8) 上池美和「鉄くず・鉄くず屋をめぐるフィールド調査から…在版「沖



- 「繩人」の戦後生活し研究に向けて」(『日本学報』二〇一四年三月)
- (9) 開高健「三文オペラ」と格闘」(『岐阜タイムス』一九五九年一月二十七日)
- (10) 「年譜」(『開高健全集』第22巻、一九九三年九月、新潮社)
- (11) 開高健「開高健年譜」(『開高健・大江健三郎集』一九六二年十月、集英社)
- (12) 谷澤永一「芥川賞」(『回想開高健』一九九一年十二月、新潮社)
- (13) 三重野ゆか「資料紹介——開高健『日本三文オペラ』関連記事」(『熊本女子大学国文研究』一九九四年三月)
- (14) 『朝日新聞』(一九九七年五月二日)
- (15) 山城響『朝日新聞』(二〇一九年八月十四日夕刊)
- (16) 富高幸雄『日本鉄スクラップ史集成』(二〇一三年十一月、日刊市況通信社)
- (17) 開高健「三文オペラ」と格闘」前掲書
- (18) 同右
- (19) 開高健「わが小説」(『朝日新聞』大阪版 一九六二年二月二十二日)

# Study of “Nihon Sanmon Opera” by Takeshi Kaikou: The importance of the role of Korean Kim

MASUDA Chikako

Takeshi Kaikou’s “Nihon Sanmon Opera” is an outstanding piece of literature written about Osaka. When this work was published, Hideo Odagiri commented about the first series of the novel. He stated that ““Nihon Sanmon Opera” in ‘Bungakukai’ is a masterpiece that indicates ‘new literary development’” “Shukan Dokushojin” December 22, 1958.” The first series of the novel was read with hope by many people. However, as the serialization progressed, it became clear that the latter half did not meet the expectations of its audience. The nagging question is: Is the second half of the work really bad as many critics state? Mss, Kim, a resident of Japan, analyzed the work with the aim of organizing it and ensuring congruence.

This paper explores the new “Nihon Sannmon Opera,” which was put together by Kim who lived in Japan while analyzing the work.

キーワード：大阪（OSAKA）、世界戦争（World War）